

# フランス語歴史音声学覚書

北村 一 親

## 0. はじめに

本稿で扱う「フランス語」とは、Fouché (1952-61 : I, 56) および、これを基にした Bec (1970-71 : II, 7-8), または Camproux (1979 : 85-86) 等で定める北部ガロ・ロマンス語領域の言語であり、「オイル語 *langue d'oïl*」とも称される言語を指す。後者の名称は Dante, *De vulgari eloquentia*, I, viii, 5 にある次の記述に由来する。

“Totum vero quod in Europa restat ab istis, tertium tenuit ydiuma, licet nunc tripharium videatur : nam alii *oc*, alii *oïl*, alii *sî* affirmando locuntur, ut puta Yspani, Franci et Latini.”<sup>1)</sup>

なお、ガロ・ロマンス語における北部領域のフランス語と南部領域のオクシタン語（プロヴァンス語）<sup>2)</sup> の言語境界はかつては現在よりも北にあったことが知られている。<sup>3)</sup>

本稿の目的は、フランス語におけるラテン語子音連続 CT [ kt ] に関するいくつかの問題点を指摘・整理することにある。CT の後に母音 I が来る場合は CT の T が先に口蓋化するので今回は扱わない。

## 1. フランス語における CT の変化形

フランス語における CT の変化形の概要を Fouché (1952-61 : III, 816) および Nyrop ([1939] : 402) を基に先行母音別に示し、関連資料を付した。

FACTU > fait ; FEW, III, 361b-62a; TL, III, 1599-1602; Gdf, III, 708a-b, IX595b; REW, 3135.

\*LACTE > lait ; FEW, V, 110a-15b; TL, V, 99-101; Gdf, X, 60a; REW, 4817.

TRACTĀRE > traiter ; FEW, XIII-2, 140b-43b, v. traitier; TL, X, 515-17; Gdf, VIII, 7b-c; REW, 8824. La Chaussée (1982:204), TRACTĀRE > trayt' iér > traitér.

PECTUS > v. piz (mod. pis) ; FEW, VIII, 111b-114a, v. peiz, peyz, piz; TL, VII, 992-96; Gdf, VI, 176a-b; REW, 6335. La Chaussée (1982:187), PECTUS > pièytus.

LECTUS > lit ; FEW, V, 236a-39b, v. liet; TL, V, 520-24; Gdf, V, 3a, X, 87c-88a; REW, 4965. \*lieit を経由 (Schwan (1893:79), Meyer-Lübke (1934:135), Regula (1955:154), Rhein-

1) Mengaldo (a cura di) (1979 : 66).

2) オクシタン語（プロヴァンス語）に関しては北村 (1997 : 1-4) 参照。

3) Wartburg (1958 : 64) 等参照。

felder(1963:100, n.1), Bec(1970-71:II, 124).

DICTU > dit ; FEW, III, 67b-68a, cf.70a, n.6; TL, II, 1959-60; Gdf, IX, 397c; cf. REW, 2628.

TĒCTU > v.teit (mod.toit) ; FEW, XIII-1, 150a-52a, v.toit, tet; Gdf, VII, 734c, toit, X, 747c, teit, 773c, toit; REW, 8609.

D(Ī)RĒCTUS > v.dreit (mod.droit) ; FEW, III, 87b-91a; TL, II, 2068-80; Gdf, II, 772c, IX, 415c-16a; REW, 2648.

STRICTUS > v.estreit (mod.étroit) ; FEW, XII, 298b-301a, estreit; Gdf, III, 656b-c, estroit, estroyt, estreit, stroit; REW, 8305.

NOCTE > nuit ; FEW, VII, 212b-18a, v.noit, nuit; TL, VI, 896-904; Gdf, V, 544c-45a, X, 215b-c, nuit; REW, 5973. \*nuoit (Rheinfelder(1963:104, 229), La Chaussée(1982:125)) > \*nueit (Meyer-Lübke(1934:135), La Chaussée(1982:125)) > nuit.

OCTO > v.uit (mod.huit) ; FEW, VII, 305a-08b, v.oit, uit, wit, owit, euit; TL, VI, 1060; Gdf, V, 589c-90a, IV, 526a; REW, 6035.

TRŪCTA > truite ; FEW, XIII-2, 325a-26a, v.troite, trutte, troute; TL, X, 712-13; Gdf, X, 817a, truite; REW, 8942.

LACTŪCA > laitue ; FEW, V, 124b-25a; TL, V, 105-06; Gdf, X, 60b-c; REW, 4833.

FACTŪRA > faiture ; FEW, III, 362b-63a; TL, III, 1605-06; Gdf, III, 711a-12a; REW, 3136.

OCTŌBER > v.oitovre (mod.octobre) ; FEW, VII, 308b-09a, uitovre, oittouvre, huitovre, octobre, octouvre; Gdf, V, 591c, oittouvre, huitovre, 568c, octobre, X, 222c, octobre; REW, 6036.

ラテン語 CT は僅かな例を除いて古フランス語 it に変化したことが大体において判る。以下では、CT > it の変化過程を考察し、さらに、これ以外の変化形を有する語についても検討を加えることとする。

## 2. CT > it の変化過程および変化時期

フランス語における CT > it の変化過程で多くの研究者は中間段階として \*xt を設定している。例えば、Meyer-Lübke (1934:135), Pope (1934:134), Fouché(1952-61:III, 815-16), Regula (1955:153), Wartburg (1958:62), Rohlf (1968:98, n.223), Zink (1996:107) 等である。(Nyrop ([1939]:14, 317) では CT > t'it > it を想定しているが、これは CT > tt との折衷的な変化過程であろう。)

フランス語に入ったゲルマン語借用語に生じたと考え得る \*ht (= \*xt) > it という変化から判断すれば、CT > \*xt > it という変化は妥当なものであると考えてよい。

frank.\*wahta > v.fr.gaite ; FEW, XVII, 451b-52a, 456b-57b, a.fr.guaite, gueite, m.fr.gueite, gueyte, gaite, waite; DEAF, G1, 58-61, mlat.WACTA, WAGTA; EWFS, 506a, mlat.WACTA; Gdf, IV, 205b-c, gaite, guaite, 373b, guaite; Ulrix, Germ.Elem.2342; Gosse (1923:208), wayt (Mons, 1315); Morlet (1969:305), gayt (1378), guait (1405); REW, 9477c / frank.\*wahtōn > v.fr.gaitier ; FEW, XVII, 452a-57b, a.fr.gaitier, waiter, waitier, m.fr.guet-

ter;DEAF, G1, 61-71, mlat.WACTARE;EWFS, 506a;TL, IV, 58-61;Gdf, IV, 206a-b, gaitier, 373b, guaiter, IX, 732b;Ulrix, Germ.Elem.2343;REW, 9479.Cf.Pope(1934:227);Fouché(1952-61:816), ただし \*gwakta, \*gwaktare のように frank.\*ht を \*kt に戻す必要はない;Rheinfelder(1963:228-29)。ちなみに、古ピカルディー方言では *Le Garçon et l'Aveugle* (13世紀) のような文学作品では ga-, gue- であるが、法令集では常に wa- である (Gossen(1923:31))。

問題なのは \*xt の次の段階であり, Meyer-Lübke, Pope や Zink はここに \*(j)t' を設定している。(Pope は \*xt > \*çt > \*(j)t' の変化過程を想定している。)しかし, \*(j)t' を脱口蓋化して it にすることは音声学的見地から判断して無理があり, 硬口蓋音 j が隣接していながら t' を脱口蓋化することは困難である。

変化形 it の成立時期を Straka (1964:44) では 4 世紀の初めから 3 世紀末より前ではないとし, La Chaussée (1982:183) では 3 世紀末から 4 世紀初め, Wartburg (1958:62) では 6 世紀以降, Zink (1996:107) では 3 世紀としている。筆者は, 上記のゲルマン語借用語の変化を考慮に入れて 5 世紀頃としたい。

### 3. フランス語最古の文献における CT の変化形

フランス語最古の文献とされる *Les Serments de Strasbourg* の fol.13r, 1.9 に CT の変化形が見られる。(Tagliavini (1981:483) または Wallensköld (1927:104λ) にファクシミリが所収。)ただし, この文献は未だ使用言語の帰属の結論が出ていない。Wallensköld (1927) はオクシタン語領域に近いロワール川以南の方言またはイル・ド・フランス方言を提案し, Tabachovitz (1932) はこの *Serments* に併記されているドイツ語方言から判断し, 9 世紀のフランス東部, ロレーヌ地方のドイツ語とフランス語の二言語併用者によるものとした。Ewert (1935) は南西フランス語方言の特徴を有するカロリング朝の宮廷言語, Monteverdi (1952:153) では人工的かつ慣用的な言語で一種の共通ガロ・ロマンス語, Hall, Jr. (1953) では西ロマンス語の中間段階を示す「前フランス語 (Pre-French)」<sup>4)</sup>, Hall, Jr. (1974:111) ではガロ・ロマンス語の一変種, Castellani (1959) (1972) は 9 世紀の北部アキテーヌの言語としている。歴史的に「宣誓」が行われたのは 842 年であるが, この *Serments* の写本 (Bibliothèque Nationale, Paris, L.9768) 自体は 10 世紀の末 (Bartsch (1880)) あるいは, この時期から 11 世紀の間 (Studer/Waters(eds.) (1962)) に写されたものであり, 9 世紀当時の言語を反映していない可能性の方が高い。ラテン語文書中にオクシタン語の語彙が出現するのが 985 年頃 (Brunel (1922:363, 367)) なので, もし, Hall, Jr. のようにガロ・ロマンス語の未分化の段階を想定するならば, この間に生じたガロ・ロマンス語分化の説明が要求されるであろう。

この *Serments* に現れる CT の変化形を有する語は dreit < D(Ī)RĒCTU であるが, この語の検討は上記で述べたこの文献の使用言語の決着を待たなければならない。Meyer-Lübke (1934:153-36) では, この語に注目しているが, CT > it の変化が生じたのは, この文献の成立時期より 500 年以上遡るので, “in gallischem Munde” に言及するのは些か見当違いで

4) Hall, Jr. (1953) に対する反論として Rea (1958) も参照。

あろう。

#### 4. CT > it 以外の変化形

以下では CT > it 以外の変化形を示す語の考察を行う。まず、LUCTĀRE > mod.lutter であるが、これは a.fr.loiter, m.fr.luitier, luitier (FEW, V, 438b-40a) であり、古形は CT > it であることが判る。EWFS, 583a; TL, V, 719-23, luitier, litier, luire; Gdf, V, 50c, luitier, luyter, X, 98c, luitier; REW, 5148. 17世紀以降、東部方言から母音の縮約が生じ、ui > u となったため、現代語形は lutter である。Nyrop ([1939]:403, 429), Fouché (1952-61:II, 288), Rheinfelder (1963:99, n.5, 230), Bec (1970-71:II, 119).

JACTĀRE > \*JECTĀRE > mod.jeter ; FEW, V, 12b-24b, a.fr.giter, m.fr.giter, cheter; TL, IV, 1641-57, giter, jetier, gitier, gietier, jetir; Gdf, IV, 270c-71b, geter, getter, jeter, jetter, -ier, gecter, jecter, gester, gieter, gister, giter, gitier, 643b, X, 41c; REW, 4568. EWFS, 547a, Nyrop ([1939]:403), Fouché (1952-61:III, 802) では vlat.\*JETTARE を立て、CT > \*TT という同化を想定している。(Regula (1955:154), "analog.Form".)

RŪCTĀRE > \*RUPTĀRE > \*ROTTARE > roter ; FEW, X, 539a-b, rutter, ruter, router; EWFS, 780a-b; TL, VIII, 1511; Gdf, VII, 244b-c, roter, router, X, 594a-b; REW, 7416, \*RUPTĀRE; cf. Nyrop ([1939]:403), Regula (1955:154). (Fouché (1952-61:III) では roter と同じく同化とされる VĪCTUALIA > v.vitaille (REW, 9314) の記述が p.802 と p.816 とでは矛盾する。)

v.drecier, mod.dresser は DĪRĒCTUS から出た \*DĪRĒCTIĀRE に由来する。FEW, III, 83b-87a; EWFS, 333a; TL, II, 2064-67; Gdf, II, 770a-b, drecier, drescier, dreschier, dresser, IX, 415a-c, drecier; REW, 2645.

PECTUS > v.piz, mod.pis ; FEW, VIII, 111b-14a, v.peiz, peyz, piz; EWFS, 705b; TL, VII, 992-96; Gdf, VI, 176a-b; REW, 6335, "Die Bedeutung „Euter“ ist frz., prov., [...], erscheint als *ped* auch im Moden.". La Chaussée (1982:187), PECTUS > piëtus. Cf. Nyrop ([1939]:402).

mod.contrat "Kontrakt" はラテン語 CT に由来せず、イタリア語 *contratto* から来たものである。(EWFS, 256b)

#### 5. 音節境界の移動と CT > it の変化

Fouché (1927:59) ではイタリア語の FACTU > fatto における変化過程を \*fak | kto > \*fak | tto > \*fakt | to > fakt | to とし、音節境界の移動と結び付けた。さらに、この音節境界<sup>5)</sup>の移動による音変化をガロ・ロマンス語やイベリア半島のロマンス語にも応用できると

した。Richter (1934) は、この理論を用いてフランス語における CT の変化過程を説明した。細部は省略するが、第一段階は CT > \*xt で、音節境界の移動による k > \*x という閉鎖の弱体化であり (ibid., 122-24, 127), 第二段階は \*xt (çt) > jt である (ibid., 130-31)。後に B. Malmberg によってスペイン語における CT の変化の説明に応用されたこの音節境界移動の理

5) 音節および音節境界に関しては北村 (1987:107-109) 参照。

論にも問題がある。これらは単に変化の記述であり、変化の原因を究明したことにはならないのである。なぜ音節の境界が移動するのかの説明されなければならない。さらに、音節の定義を明確にし、実際の言語資料（特にオクタン語等のように語末母音が消失し、音節構造が変化した言語の資料）の検討など課題は多く残されている。これらの問題について詳しくは北村（1987:106-110）、（1999:72-74）にまとめておいたので参照されたい。

## 6. 今後の展望

フランス語における CT の変化を扱う際に必ず問題とされるのがケルト基層説である。例えば Wartburg (1950 : 34) では基層による条件付き音変化への言及があり、Vendryes (1925 : 272), Bolelli (1940 : 197-99), Wartburg (1958 : 30-31) ではロマニアにおける CT > \*xt の変化が生じたと考え得る地域と古くケルト人が居住していた地域との一致や、kt > \*xt の変化がウェールズ語やアイルランド語、ガリア語<sup>6)</sup>に見られることに関連してフランス語（ロマンス語）におけるケルト語基層説の妥当性を議論している。この問題に限らず基層説を論ずる場合は基層と想定される言語の深い知識や考察が要求される。筆者も年来、ケルト語基層の問題を詳しく検討しようと考えているが、他のことに関わるが多くなかなか実現できずにいる。今後の課題としたい。

### (付) FEW 巻次・分冊番号対照一覧

※1999年3月現在。出版社は特記ない場合は Zbinden (Basel)。略語は次のとおり。B. =Berichtigungen / Bd. =Band / HBd. =Halbband / Lfg. =Lieferung / N. =Nachträge / Nd. =(Photomechanischer) Nachdruck / R. =Register / T. =Teil

Bd. I ("A" - BYZANTIUS/R.) Tübingen: J. C. B. Mohr, Nd. 1948	Lfg. 39 ("G" - GLŌCĪRE) Nd. 1971
Bd. II (C. K. K. Q) HBd. 1 ("C" - *COHORTĪLE) Nd. 1971 HBd. 2 Lfg. 34 (COINQUINARE - CONDATE) Nd. 1975	Lfg. 40 (GLŌCĪRE - GŪLA) Nd. 1971 Lfg. 42 (GŪLA - HŌRA) Nd. 1971 Lfg. 45 (HŌRDĒŌLUS - INDES) Nd. 1971 Lfg. 46 (INDES - *IZAR-DI/R.) Nd. 1974
Lfg. 35 (CONDECENS - CŌR) Nd. 1976 Lfg. 36 (CŌR - KRIKK-) Nd. 1971 Lfg. 37 (KRIKK- - CŪLPA) Nd. 1976 Lfg. 38 (CŪLPA - CYTĪSUS/R.) Nd. 1976	Bd. V (J. L.) Lfg. 41 (JĀCĒRE - LANGOBARDUS) Nd. 1971 Lfg. 43 (LANGOBARDUS - LĪGĀRE) Nd. 1978
Bd. III (D-F) = (DAB - FYR/R.) Nd. 1971	Lfg. 44 (LĪGĀRE - LYSIMACHIA/R. / Corrigenda und Addenda) Nd. 1978
Bd. IV (G. H. I.)	

6) ウェールズ語やアイルランド語、ガリア語等のケルト語に関しては北村（1992）参照。

- Bd. VI (M)  
 T. 1  
 Lfg. 62 (MABILLE – MALUS) Nd. 1988  
 Lfg. 66 (MALVA – MANSUETARE) Nd. 1988  
 Lfg. 72 (MANSUETARE – MARTINUS) Nd. 1989  
 Lfg. 78 (MARTINUS – MATRICULA/TRAHĚRE) Nd. 1989  
 Lfg. 87 (MĀTRĪCULĀRIUS – MĚDĚTĀS) 1963  
 Lfg. 128/129 (MĚDĚTĀS – MEPHITIS) 1968  
 T. 2  
 Lfg. 117/118 (MERCATIO – MNEME) 1967  
 T. 3  
 Lfg. 111/112/113 (MÖBĪLIS – MŪTARE) 1966  
 Lfg. 132 (MŪTARE – MYXA/ N. B. /R.) 1969
- Bd. VII (N – PAS)  
 Lfg. 47 (NA – NOBILIS) Nd. 1978  
 Lfg. 48 (NOBILIS – ÖCŪLUS) Nd. 1978  
 Lfg. 49 (ÖCŪLUS – PANNUS) Nd. 1981  
 Lfg. 50 (PANNUS – PASTŪRA/N. B.) Nd. 1981
- Bd. VIII (PATAVIA – PIX)  
 Lfg. 51 (PATAVIA – PĚLĀGOS) Nd. 1981  
 Lfg. 54 (PĚLĀGOS – PĚTRA) Nd. 1984  
 Lfg. 55 (PĚTRA – PĪLA) Nd. 1984  
 Lfg. 58 (PĪLA – PĪX) Nd. 1988
- Bd. IX (PLACABILIS – PYXIS)  
 Lfg. 59 (PLACABILIS – POLIRE) Nd. 1988  
 Lfg. 61 (POLIRE – PÖTIO) Nd. 1988  
 Lfg. 63 (PÖTIO – PRĪMUS) Nd. 1988
- Lfg. 65 (PRĪMUS – \*PŪGNALIS) Nd. 1988  
 Lfg. 68/69 (\*PŪGNALIS – PYXIS/R.) Nd. 1988
- Bd. X (R)  
 Lfg. 73/74 (“R” – RĚNÖVARE) Nd. 1989  
 Lfg. 79 (RĚNÖVARE – REX) Nd. 1989  
 Lfg. 81 (REX – RÖSA) Nd. 1989  
 Lfg. 84/85 (RÖSA – RŮTRUM/ N. B. /R.) Nd. 1989
- Bd. XI (S-SI)  
 Lfg. 75 (“S” – SALTARE) Nd. 1989  
 Lfg. 82 (SALTARE – SARCŪLARE) Nd. 1989  
 Lfg. 86 (SARCŪLARE – SCRĪNIUM) 1963  
 Lfg. 91 (SCRĪNIUM – SĚNIOR) 1963  
 Lfg. 93 (SĚNIOR – SEYSEL) 1964  
 Lfg. 96 (SĪ – SITUS/N. B.) 1964
- Bd. XII (SK-Š)  
 Lfg. 89 (SKALĚNÓS – SÖRĪX) 1963  
 Lfg. 90 (SÖRĪX – STABULUM) 1963  
 Lfg. 94 (STABULUM – SŮBĪTUS) 1964  
 Lfg. 95 (SŮBĪTUS – SUPPLICARE) 1964  
 Lfg. 105/106 (SUPPLICARE – ŠIBBÓLET/N. B. /Letzte N. B. /R.) 1966
- Bd. XIII  
 T. 1 (T – TI)  
 Lfg. 99/100 (“T” – TĚNACŪLUM) 1965  
 Lfg. 107/108 (TĚNACŪLUM – TITUS) 1966  
 T. 2 (TO – TYRUS)  
 Lfg. 97 (TO – TÖRTA) 1965  
 Lfg. 101/102 (TÖRTA – TRĪTARE) 1965  
 Lfg. 104 (TRĪTARE – \*TŪKKA) 1966  
 Lfg. 116 (\*TŪKKA – TYRUS/

- | N. B. /R.) 1967                      | N. B. /R.) 1967  |
|--------------------------------------|--|
| Bd. XIV (U-Z)                        | Bd. XIX (Orientalia)   |
| Lfg. 56 (ÜBER-VALDĒ) Nd. 1988        | Lfg. 109 (ABĀR-QUBBA) 1966   |
| Lfg. 64 (VALDĒ-VENTUS) Nd. 1988      | Lfg. 122 (QUBBA-ZWĀWA/N. B. /R.)                                     |
| Lfg. 67 (VENTUS-VĪBRARE)             | 1968   |
| Nd. 1988                             | Bd. XX (Entlehnungen aus den übrigen                                 |
| Lfg. 71 (VĪBRARE-VĪRĪDIS)            | Sprachen)  |
| Nd. 1989                             | Lfg. 125 (1. Bret. -14. Pol. /N. /R.)                                |
| Lfg. 76/77 (VĪRĪDIS-ZYGOMA/          | 1968   |
| N. B. /R. ) Nd. 1989                 | Bd. XXI (Materialien unbekannten oder un-                            |
| Bd. XV (Germanische Elemente, A-F)   | sicheren Ursprungs, 1)   |
| T. 1 (Germanische Elemente,          | Lfg. 98 A. L'Univers 1965  |
| *AARDEEND-BRYMAN)                    | Lfg. 110 Les plantes, 1 1966   |
| Lfg. 124 (*AARDEEND-BĒRMAN)          | Lfg. 115 Les plantes, 2/B. L'Homme, 1                                |
| 1968                                 | 1967   |
| Lfg. 126 (BĒRMAN-*BOSK-) 1968        | Lfg. 120 L'Homme, 2 1967   |
| Lfg. 130 (*BOSK--BRYMAN) 1969        | Lfg. 131 L'Homme, 3 1969   |
| T. 2 (Germanische Elemente,          | Bd. XXII (Materialien unbekannten oder un-                           |
| *BU <sub>[sic]</sub> -FÜTTERN)       | sicheren Ursprungs, 2)   |
| Lfg. 123 (BŪ-*FAIHIÐA) 1968          | T. 1   |
| Lfg. 133 (*FAIHIÐA-FÜTTERN/N.        | Lfg. 140 1976  |
| zu Bd. 16-17/N. B. zu Bd. 15/R. zu   | Lfg. 147 1986  |
| Bd. 15, T. 1-2) 1969                 | Lfg. 150 1990  |
| Bd. XVI (Germanische Elemente, G-R)  | Lfg. 156 1997  |
| Lfg. 52 (GAAN-*HARIBERGŌN)           | T. 2   |
| Nd. 1989                             | Lfg. 138 1973  |
| Lfg. 53 (*HARIBERGŌN-CHIP)           | Lfg. 153 1993  |
| Nd. 1991                             | Bd. XXIII (Materialien unbekannten oder                              |
| Lfg. 57 (CHIP-LŌS) Nd. 1991          | unsicheren Ursprungs, 3)   |
| Lfg. 60 (LŌS-*POKKA) Nd. 1991        | Lfg. 119 1967  |
| Lfg. 70 (*POKKA-RYF/N. B. /R.)       | Lfg. 127 1968  |
| Nd. 1991                             | Lfg. 136 1970  |
| Bd. XVII (Germanische Elemente, S-Z) | Bd. XXIV (refonte du t. 1 <sup>er</sup> . A-AORTE <sub>[sic]</sub> ) |
| Lfg. 80 (SABEL-*SKINA) Nd. 1993      | Lfg. 134 (A-ACER) 1969   |
| Lfg. 83 (*SKINA-STEEK) 1962          | Lfg. 137 (ACER-ADVENĪRE) 1973  |
| Lfg. 88 (STEEKLIJN-*TITTA) 1963      | Lfg. 139 (ADVENĪRE-ALĀCER) 1975                                      |
| Lfg. 92 (*TITTA-*WĀFLA) 1964         | Lfg. 141 (ALĀCER-AMARACUS)   |
| Lfg. 103 (*WĀFLA-*WASO) 1966         | 1978   |
| Lfg. 114 (*WASO-ZWINKEN/             | Lfg. 142 (AMARACUS-AMPHĪBIOS)  |
| N. B. /R.) 1966                      | 1981   |
| Bd. XVIII (Anglizismen)              | Lfg. 143 (AMPHĪBIOS-ANHĒLARE)  |
| Lfg. 121 (ABERRATION-YEOMAN/         | 1982   |

- |                                |   |
|--------------------------------|---|
| Lfg. 144 (ANHĒLARE—AORTĒ) 1983 | Lfg. 151 (ASPERGERE—                      |
| Bd. XXV                        | *ASSŪLARE <sup>2</sup> ) 1990             |
| T. 2                           | Lfg. 152 (*ASSŪLARE <sup>2</sup> —        |
| Lfg. 135 (APAIDEUTOS—          | ATRIUM) 1992                              |
| ARCHITECTUS) 1970              | Lfg. 154 (ATRIUM—AUCTOR) 1996             |
| Lfg. 145 (ARCHITECTUS—         | Lfg. 155 (AUCTOR—                         |
| ARGENTUM) 1985                 | *AURĀTĪCUS) 1997                          |
| Lfg. 146 (ARGENTUM—            | Beiheft. Ortsnamenregister, Literaturver- |
| ARMORACEA) 1986                | zeichnis, Übersichtskarte. Tübingen:J.    |
| Lfg. 148 (ARMORACEA—           | C. B. Mohr, 2. Aufl., 1950                |
| ARTIFICIALIS) 1987             | Supplement zur 2. Aufl. des Bibliogra-    |
| Lfg. 149 (ARTIFICIALIS—        | phischen Beiheftes. 1989                  |
| ASPERGERE) 1988                | Liste des abréviations géolinguistiques   |
|                                | françaises. 1981                          |

## 略語一覧

a. = 古 (フランス語) / DEAF=Baldinger(1974-) / EWFS=Gamillscheg(1969) / FEW=Wartburg(1948-) / fr. = フランス語 / frank. = フランク語 / Gdf=Godefroy(1937-38) / m. = 中 (フランス語) / mlat. = 中世ラテン語 / mod. = 現代語 / REW=Meyer-Lübke(1972) / TL=Tobler/Lommatzsch(1955-) / Ulrix, Germ. Elem. =Ulrix(1907) / v. = 古語 / vlat. = 俗ラテン語

## 参考文献一覧

- Baldinger, Kurt (1974-) *Dictionnaire étymologique de l'ancien français*. G1 (1974)-9/10 (1995), Index (1997), H1 (1997)-2 (1998). Tübingen.
- Bartsch, Karl (1880) *Chrestomathie de l'ancien français*. Leipzig.
- Bastin, J. (1905) *Précis de phonétique et rôle de l'accent latin dans les verbes français*. Paris/Saint-Petersbourg, 2<sup>e</sup> éd.
- Bec, Pierre (1970-71) *Manuel pratique de philologie romane*. I-II. Paris.
- Berschlin, Helmut/Felixberger, Josef/Goebl, Hans (1978) *Französische Sprachgeschichte*. München.
- Bolelli, Tristano (1940) "Contributo allo studio dell'elemento celtico nella fonetica romanza," *ArchRom*, X X IV, 188-205.
- Brunel, C [lovis] (1922) "Les Premiers Exemples de l'emploi du provençal dans les chartes," *Rom.*, XLVIII, 355-64.
- Camproux, Charles (1979) *Les Langues romanes*. Paris, 2<sup>e</sup> éd.
- Castellani, Arrigo (1959) "Le Problème des Serments de Strasbourg," in *A. VIII. CISR*, II, 1, 103-25.
- (1972) "L'Ancien Poitevin et le problème linguistique des Serments de Strasbourg," in G. Straka (éd.) *Les Dialectes de France au Moyen Age et aujourd'hui*. Paris, 387-428.
- Ewert, Alfred (1935) "The Strasburg Oaths," *TPhS*, 1935, 16-35.
- (1943) *The French Language*. London, 2nd ed., Repr., 1969.
- Fouché, Pierre (1927) *Études de phonétique générale*. Paris.

- (1952-61) *Phonétique historique du français*. I-III. Paris.
- Gamillscheg, Ernst (1969) *Etymologisches Wörterbuch der französischen Sprache*. Heidelberg, 2. Aufl.
- Godefroy, Frédéric (1937-38) *Dictionnaire des l'ancienne langue française*. Paris, nouveau tirage.
- Gossen, Charles Théodore (1923) *Grammaire de l'ancien picard*. Paris, réimpr., 1976.
- Hall, Jr., Robert A [nderson] (1953) "The Oaths of Strassburg," *Lg*, XXIX, 317-21.
- (1974) *External History of the Romance Languages*. New York.
- Holtus, Günter (1990) "Französisch : Gliederung der Sprachräume," *LRL*, V, 1, 571-95.
- 北村 一親 (1987) 「スペイン語におけるラテン語 CT [kt] の音変化」『名古屋大学言語学論集』 3, 103-42.
- (1992) 「ケルト語の特異性」『アルテス・リベラレス』 50, 1-16.
- (1997) 「プロヴェンス語 (オクシタン語) の CT について」『アルテス・リベラレス』 60, 1-13.
- (編) (1999) 『言語の制御と統合に関する多角的視点からの研究』盛岡.
- La Chaussée, François de (1982) *Initiation à la phonétique historique de l'ancien français*. Paris, nouvelle éd.
- Mengaldo, P. V. (a cura di) (1979) *De vulgari eloquentia*, in *Dante Alighieri, Opere minori*. II. Milano/Napoli, 1-237.
- Meyer-Lübke, Wilhelm (1934) *Historische Grammatik der französischen Sprache*. I. Heidelberg, 5. Aufl.
- (1972) *Romanisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg, 5. Aufl.
- Monteverdi, Angelo (1952) *Manuale di avviamento agli studi romanzi*. Milano.
- Morlet, Marie-Thérèse (1969) *Le Vocabulaire de la Champagne septentrionale au Moyen Age*. Paris.
- Nyrop, Kr [istoffer] ([1939]) *Grammaire historique de la langue française*. I. Copenhague, 4<sup>e</sup> éd.
- Pope, M [ildred] K [atherine] (1934) *From Latin to Modern French*. Manchester, repr., 1961
- Rea, John A. (1958) "Again the Oaths of Strassburg," *Lg*, XXXIV, 367-69.
- Regula, Moritz (1955) *Historische Grammatik des Französischen*. I. Heidelberg.
- Rheinfelder, Hans (1963) *Altfranzösische Grammatik*. I. München, 3. Aufl.
- Richter, Elise (1934) *Beiträge zur Geschichte der Romanismen*. I. Halle a. S.
- Rohlf, Gerhard (1968) *Vom Vulgärlatein zum Altfranzösischen*. Tübingen, 3. Aufl.
- Roncaglia, Aurelio (1971) *La lingua d'oïl*. Roma.
- Roques, Gilles (1990) "Le Français : Étymologie et histoire du lexique<sub>[sic]</sub>, a) Étymologie," in *LRL*, V, 1, 507-18.
- Schwan, Eduard (1893) *Grammatik des Altfranzösischen*. Leipzig.
- Straka, Georges (1964) "L'Évolution phonétique du latin au français sous l'effet de l'énergie et de la faiblesse articulatoires," *TraLiLi*, II, 1, 17-98.
- Studer, P. / Waters, E. G. R. (eds.) (1962) *Historical French Reader*. Repr., London.
- Tabachovitz, A. (1932) *Étude sur la langue de la version française des Serments de Strasbourg*. Uppsala.
- Tagliavini, Carlo (1981) *Le origini delle lingue neolatine*. Bologna, 6<sup>a</sup> ed., VI rist.
- Tobler, Adolf/Lommatzsch, Erhard (1955-) *Altfranzösisches Wörterbuch*. Wiesbaden/Stuttgart. I-III, unveränderter Neudruck; III-VI, fotomechanische Wiedergabe. Lfg. 1(Bd. I)(1955)-Lfg. 91 (Bd. XI) (1995).
- Ulrix, Eugeen (1907) *De Germaansche Elementen in de Romaansche Talen*. Gent.
- Vendryes, J. (1925) "Celtique et roman," *RLiR*, I, 262-77.
- Wacker, Gertrud (1916) *Über das Verhältnis von Dialekt und Schriftsprache im Altfranzösischen*. Halle a. S.
- Wallensköld, Axel (1927) "Les Serments de Strasbourg : Le Plus Ancien Texte français conservé," in B. Schädel/W. Mulertt (éds.) *Philologische Studien aus dem romanisch-germanischen*

*Kulturkreize*. Halle a. S., 87-104.

Wartburg, Walther v[on] (1948-) *Französisches Etymologisches<sub>[sic]</sub> Wörterbuch*. Tübingen/Basel. Bd. I, photomechanischer Nachdruck (1948)-Lfg. 155 (Bd. XXV, 1) (1997)/Lfg. 156 (Bd. XXII) (1997).

— (1950) *Die Ausgliederung der romanischen Sprachräume*. Bern.

— (1958) *Évolution et structure de la langue française*. Berne, 5<sup>e</sup> éd.

Wolf, Lothar (1979) *Französische Sprachgeschichte*. Heidelberg.

— /Hupka, Werner (1981) *Altfranzösisch*. Darmstadt.

Wüest, Jakob (1979) *La Dialectalisation de la Gallo-Romania*. Berne.

Zink, Gaston (1996) *Phonétique historique du français*. Paris, 5<sup>e</sup> éd.

(平成10年度文部省科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) による研究/課題番号10610507)